

ものづくり企業ならめざしたい 「匠」企業、そのメリットとは。

大阪府内のものづくり中小企業で、「高度な技術力」「高品質・低コスト・短納期」など総合力が高く、市場で高い評価を得ている企業を表彰する、大阪ものづくり優良企業賞「匠」。2008年から14年続く顕彰制度だ(2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響のため募集中止)。昨年の時点で846社が「匠」受賞企業となっている。申請時の現状分析や見つめ直し、知的財産の洗い出しなどによる「自社の

強み」の発見、受賞による社員のモチベーションのアップなど「匠」企業をめざすことから得られるメリットは大きい。またその後、国の「ものづくり日本大賞」に選定される企業を輩出するなど、大阪の製造業にとっての「登竜門」的な存在でもあり、その後BtoC向けの製品を対象とする「大阪製ブランド」認定にチャレンジする企業も見られる。今回は「匠」企業3社の代表が集まり、「匠」受賞以前と以降の変化、これから進む道などを語り合った。



左から

株式会社武林製作所

代表取締役社長 武林 美孝氏

株式会社ウチノ

代表取締役 内野 恵司氏

株式会社プラ技研

代表取締役 菊澤 良治氏

「匠」企業になることで、 町工場のイメージから脱却したい。

内野 そもそも大阪ものづくり優良企業賞「匠」(以下、匠)は、みなさんどうやって知られたのですか？

武林 うちの場合は、八尾の中小企業サポートセンターから紹介されたんです。当社には大阪府優秀技能者表彰(なにわの名工)に選定された職人が3人在籍しているのですが、そのうちのひとりが「八尾ものづくり達人」に選ばれ、それが縁でサポートセンターとおつきあいが始まりまして。応募したのは2008年、匠が開始された最初の年になりますね。

内野 それはすごく早いんですね。



武林 私が入社した頃、当社は「いかにも昭和の町工場」という雰囲気だったんですね。それが嫌で嫌で。なんとか脱却したいという思いをずっと抱えていて。その方法のひとつが賞を取ること

だったんです。

内野 外から評価されたことになりませんか。

武林 そうなんです。対外的な評価が欲しかったし、それをきっかけに変わりがかった。先ほどお話ししたように職人が個人で賞をいくつかいただいたので、今度は会社でもチャレンジしようという流れになりました。

内野 うちはその2年後、2010年の受賞ですね。鍛造業界には近畿鍛造品事業協同組合というものがあり、定期的にいろんなインフォメーションをいただけるんですね。あるとき、顧客である会社が匠の前身の「大阪フロンティア賞」(正式名称:「賞(匠) by 繁盛 大阪フロンティア賞」)を受賞したというニュースを目にしました。さらにその後、知り合いの会社も匠を受賞した。そ

こではじめて「匠って何だ?」と気になって調べ、アクションを起こしたんです。

菊澤 当社は2016年の受賞なので、みなさんの中ではいちばん最近ですね。私自身は匠についてまったく知らなかったのですが、社員がどこからか情報を仕入れてきて「こういう顕彰制度があるらしいので、一度出してみてもどうでしょう」と提案された。そこから彼らがMOBIOに相談に行き、申請書も作成しました。だから私は申請書をチェックしたぐらいしかやってないですけど(笑)。

武林 最初はそうなりますよね。顕彰制度についてもよくわからないし。

内野 うちも申請書も私が全部書きましたよ。以前、経済産業省で創造技術開発事業に認められた時に申請書を書いているので意外とスムーズに進められました。

菊澤 そうこうしているうちに申請途中からMOBIOの担当者が会社を訪れて、積極的に対応していただいた。同時に「プラ技研さんなら、優良企業賞受賞企業のうち、知的財産への取組みが優秀と認められる企業を表彰する知的財産賞も狙えるから、こちらを出しましょう」となった次第です。

内野 匠と知的財産部門、同時受賞なのですね。

菊澤 「オンリーワンのものづくりにこそ価値がある」というのが、私の考え。ですから技術向上とともに力を入れてきたのが知財戦略なんです。そのとき知財のほうを受賞している企業は少ないらしいですね。審査のときも知財についていろいろ尋ねられました。

武林 国内外問わず、特許をすごく持ってらっしゃいますもんね。

菊澤 うちの場合、国内で特許取得したものはヨーロッパとアメリカ、中国でも特許を取るようになっています。審査の時にもお話ししたのですが、知財には2種類あります。オンリーワンの技術であれば特許を取って公表すればいい。要は真似をしようとしても、